である。之ッは、向上の極と向下の極・極楽のハテと地獄のハテ・大の極と小の極・との一致点で、「〇の⊙」で、「⊙の〇」で、「如是神魔の体用」で、「本体現象不二不一」なのである。

ささかにの　くものいよりも　ほそければ　きづかざりけり　みちのあやいと。

と、人の嘆じたる、宇宙一貫の「真」である。

此くの如くに乖離分散して、その極に達したる時、忽然として、一点不滅の火なることを証し来るのである。

また是ッ〜なるなり。

第十六問、

「此の神業を、神代の神はミソギと教へて、神界現成の御行事なりと拝承す」と修禊の辞に教へられてありますが、よりよきものを生産する、よりよき世界を創造する、よりよき人物を育成する。即、これが神業で神代の神のミソギと教へ給ふ所で、マツリであると解釈してもよろしいでございませうか。

大正人道教主人（三）

多田山谷祕稿

○宇氣毘（十字架上のエス）

世上傳ふるところの耶蘇或は基督と称する人が十字架上で死したるは、所謂犠牲の義を教へて人類の救濟を神に誓ひたる爲に、神の宇氣毘によりて十二使徒等に宇氣毘をなしたるものなり。

基督教の今日まで世人を指導し来たりしは、主としてと云はんよりは寧全く此の宇氣毘に依るなり。

世人は大宗教が出たならば世間は改善せらるべしと思ひ、また云ひつつあれども、達磨の如き叡敏の質・大器の人も小林に籠居して動かざりしが故に、法燈を傳へ得たるものにして、當時僅に一人の資を得たるのみなりしを見ても、亦悉達多太子たる釋尊が五十年の説法にしても時人を教へ得たるは十六弟子の他、幾人を算へ得べきにもあらず、基督たる耶蘇は血を以つて衆を贖ふの悲劇に終れるを見れば、思ひなかばに過ぐるものあることを知らるべきなり。

之れを見て現在世界を救濟するは宗教家の出現に待つべきにあらずして、前代の宗教家が遺したる法燈の明なるか否かに依つて安不安は生ずるものなることを知らるるなり。

故に、現代の太平和楽は主として政治の力なり。

政治の中の宗教なり、教育なり、文藝なりにこそあるなれ。

◇

陽春行樂山河微吟するかと思はるる好季節と相成候へども、朝野政戦の聲囂しく都鄙利害の争ひを絶たざるは國に天皇無きの國なりと云ふ。

川面凡兒は云へり。

「□は主君無きの國なり」と。

されど思へ。

□は零なれば天皇國にして有無にはあらざるなり。

◇

題に觸れ来り、特に四月以降は大河平氏に太陽の圖を見て其の材料を作らしめ、筑波にありては月夜の水蒸氣多きを幸に三山の祕事を目睹せしめたる等、彼が獨修一生或は牧師宣教師に就きて三十年五十年を費し候とも得らるべき祕事には無之と断言致候。

然れども、猫に小判と申す俚諺の有之候へば、生来の邪悪なる素質は今生にて救濟し得らるべきには無之候。

あなあはれいのちながしとおもふまにつきたちにけりとしもうつりて。

之れ高木神の教ふるところにして弓矢の祕言霊なり。

◇

陽春行樂山野も微吟するが如き明治時代は好かったと久保提太氏は云へり。

行雲有心
臨于流水兮。
舟子無心
而破明月兮。

宇氣比

多田山公谷祕稿

山外一塊土又是一圓光裡過客。

神の宇氣比に依るが故に、人間の身も神の完きが如く完全ならんと志し善惡邪正是非曲直を判別し得るに到るなり。

宇氣比の宇は極小の音、氣は産出にして箇體、比は日にして魂にして氷にして⊙にして⊗にして田にして圏なれば、宇氣比とは極大極小の靈が結び成した る最大最小の神界楽土にして、又、其の主神にして司神にして狭霧にして伊吹にして三女神にして五男神にして天安河にして建速須佐之男にして月夜見月弓月讀命にして天照大御神にして御倉擧板神にして稲倉魂にして怪奇異靈の存在なり、大氣津比賣にして保食神にして豊受比賣にして、女にして芽にして目にして凹にして沃土楽地にして、陰にして陽にして陰陽不測にして神なるなり、四象にして両儀にして太極にして無極にして極無極にして極大極小にして日止なる四象にして日月にして易なり。

和身魂にして幸身魂にして奇身魂にして咲身魂にして術魂にして、塩土翁なる九魂にして、大日本天皇たる荒身魂にして、眞身魂にして、生玉にして足玉にして玉積魂にして神魂にして高魂にして、底度久御魂にして淳夫多都御魂にして阿波佐久御魂にして、大國魂にして、生鳴にして足鳴にして、大日本豊秋津根別にして、大八洲國にして八神殿にして、八尋殿にして、天御柱にして國御柱にして、神世七代にして五代にして八代にして、八百萬魂にしてミタマなるなり。

御魂にして魂にして身魂にして箇體なる宇宙にして、日にして日神にして、月にして月讀命にして、黄泉幽界にして、明闇にして零にして、十なる十字架にして、白玉身にして緋色（ひかり）にして、天淳神にして、國淳神にして、天神地祇にして綿淳見にして山祇にして、國常立にして天常立にして、國常尊なる可美葦牙彦舅にてましますなり。

阿知米にして阿阿比賀天吽爾吽由宇阿伊固宇にてましますなり。

一二三四五六七八九十にして一二三四五六七八九十百千萬にてましまず三十二人供人にして五供緒にして十種神寶にして三種神器にして三重子にして三貴子にして比咩にして比古にして神魔にして凹凸にして、如是にして如如にして如来にして、死生觀にして、生死遷流にして、不生滅にして、生不生にして滅不滅にして如如去来なりとは云へるなり。

之れをヒフミなりと云ふなり。

ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリなりとは云へるなり。

以上

昭和十一年十一月十一日夜半

さて、「宇気比」というのは、少々神話的な表現を借りて、説明するならば、「二柱の日神(ヒノカミ)が相契(あひちぎ)りて新たな日神(ヒノカミ)を産み成す神業(カミワザ)」のことである。その処(ところ)は「サギリの中」であり、その「サギリ」は「気吹(イブキ)の結果」として生じた「零(ヒ)」そのものである。

即ち、「イブキ」とは「日神(ヒノカミ)の物実(ものざね)を砕いて元の零(ヒ)に戻す作業」であり、「ウケヒ」の前段階である。そして、その上で、「その零(ヒ)を組み直して新たな日神(ヒノカミ)を産み成す作業」が「ウケヒ」なのだ。物実(ものざね)とは、その神と同じ「本質」を宿した個体であり、それ故、新たに生まれた神もまたその同じ「本質」を受け継いではいるが、一旦砕かれてからまた組み直された実体であるため、その「作用(はたらき)」は祖(おや)たる神とは異なっている。異なっているからこそ、「新たな」日神(ヒノカミ)である、と言えるのだ。

また、「無宇宙全体」という規模で考えれば、「零(ヒ)」は即ち「〇神(ヒノカミ)」である。よって、「ウケヒ」の説明としては「〇神(ヒノカミ)が新たな日神(ヒノカミ)を結び成すこと」と表現することもまた可能だろう。人の身ながらその境地を知り、そうした能力の一部を分与されることを以て『神の宇気比(ウケヒ)を得る』と称する。

NO.

DATE

「極大極小」　　㋓の段階

人間の身では理解できない。

㋒の段階

アマノイハヤト
（人間の認識能力の限界）

「最大最小」　　㋜の段階

人間の身でもかろうじて理解できる。

直日　　最大最小の神界楽土

歪められることなく
きれいに直結できた時、

無宇宙の実在が持つ諸力が、
そのまま人間世界に実現する。

人の身ながら
神となる。

この土このまま
高天原

コトアマツカミ

アマツカミ

クニツカミ

（ヒノカミ）無宇宙

ミヅガキ瑞垣

宇宙（タマノカミ ミノカミ）

KOKUYO

天鹿兒弓（アマノカコユミ）

多田山谷祕稿

世上所傳、日文（ひふみ）なるものあり。

徳川氏執政時、平田篤胤、仙童寅吉より聞知、記録に止めて印行せるものは左の如し。

ヒフミヨイムナヤコトモチロ
比布美與以牟奈耶古登毛智呂
ラネシキルユ井ツワヌソヲタハ
良禰志伎流由韋都和奴曾袁哆波
クメカウオエニサリヘテノマス
玖米迦汙游良爾佐理閉弓乃麻須
アセエホレケ
阿世惠保禮氣。

之れを一音一義の言靈となす。

佛者所云の六道輪廻との意なれば、因より区切無く、首尾も無きなり。

迷ひ又迷ひ、苦しみ又苦しみ、堕落又堕落、死又死、分散又分散、底止するところ無きを教へたる言靈にして、一言主神（ヒトコトヌシノカミ）の司りましますところなり。

一言主神と称へまつるは葛城野神（かつらぎのかみ）の又名なれば太玉尊（ふとたまのみこと）の神徳を讃美したる日本民族傳承の言靈にして称へまつれる御名なり。

日文とは『ひふみ』にして、日経身なると共に火踏なり。

幕輾還流の意なるなり。

神恩昭昭
神威赫灼
神徳穆穆
日月運行而攸忽俄然
轉迷開悟之言靈。
之是一音響。
之是一圓相。

如是言靈とは、
ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ。
是れなり。

之れ一音に一義を有すると共に二十一音にて復一義なるもの最大にして最小の音なり。

日本民族傳承の神傳に『オトタナバタ』とは、此是神言（かみのことば）を讃美したるなり。

佛者所云の妙音觀世音なり。

梵音なり。

其の人を教へんが爲に形容して海潮音と呼ぶところ、即神音なるなり。

故に、古来絶えて之れを解説せず、唯一專念奉称したる而耳。

金鈴一振
梵鐘一打
火光一閃
忽然體得之是一音。

ひは日なり。火なり。靈なり。魂なり。一なり。極大なり極小なり。

ふは経なり。経過なり。時量師（ときおかし）なり。変遷なり。轉化なり。死滅なり。二なり。微細なり。小宇宙なり。

みは身なり。實なり。見なり。三なり。参進なり。退くこと無きなり。分身なり。箇體なり。子女産出なり。

よは代なり。世なり。亘なり。
隔離なり。四なり。死なり。
終息なり。
いは進なり。出なり。五なり。
正なり。
むは結なり。群なり。集なり。
六なり。結實なり。結實分
布蕃息傳播なり。
なは凪なり。和なり。平穏静寂
なり。七なり。塩土（しほつち）なり。人間身なり。
やは彌なり。進なり。鋭なり。
矢なり。八なり。分割なり。
咲なり。笑なり。和樂なる
と共に死滅なり。生死一如
なり。
こは固なり。凝なり。結晶なり。
兒なり。
こは轉輾変遷離散なり。
のは野なり。平なり。原なり。
和樂なり。女徳なり。
たは高なり。足なり。顯なり。
現なり。
りは分散なり。殺害なり。征伐
なり。
やは足り満ちて産出分身する力
なり。

もは思なり。慕なり。
もは思慕戀愛なり。
ちは血なり。散なり。分散なり。
ちは千にして無際無涯なり。
みは身にして道なり。
ては照なり。赫灼なり。
りは分身なり。子女なり。箇體
なり。小宇宙なり。
之れを各音の表現する意義と
なす。
而して、二十一全音は宇宙構
成の眞理を表示せる 天御鏡尊
（あまのみかがみのみこと）の
神徳にして乾坤一音の神言靈な
ると共に魔類を調伏濟度救出し
て、神界楽土に誘導摂入するの
神音なり。
示（しん）音なり。
[illegible] 音なり。
日なり。
日神（ひのかみ）なり。
一音響にして又一圓相なり。
三重體（さんぢうのたい）な
り。
二重用（にぢうのよう）なり。
四重示（しぢうのしん）なり。
五重示（ごぢうのしん）なり。

七重[illegible]（しちぢうのしん）なり。
九重[illegible]（くぢうのしん）なり。
是れを窮數となし又満數となす。
一二三四五六七八九十百千萬
となす。
阿阿比賀天吽爾吽由宇阿伊固
宇なるなり。

魔澄鏡（ますみのかがみ）

以上

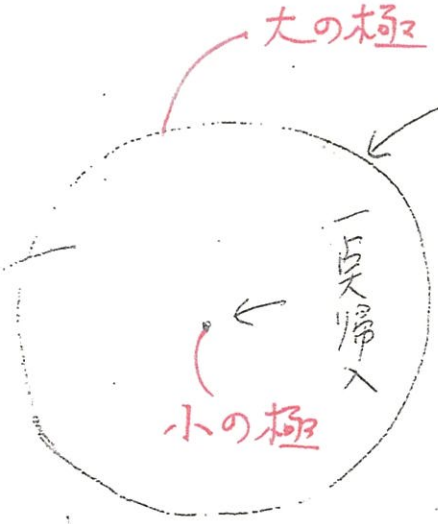
昭和九年二月二十二日

学ひ、ふみよいむなやこのたりわももちろみて
ヲ
リノ千音ヲ數ニシテ算フレバ一二三四五六
七八九十百千萬ナルガ如クひが火口氷靈魂
語ニシテふが經古舊過ヘ去ニシテみが身心實態
見充滿ニシテよが代世重樹節ニシテいが寝
正誠任者死人生義者人むが無ニシテ友
達ガ茅和布魚者和尺ニシテわが矢彌嬰兒
琴ニシテこが固疑固ニシテこが兒筍體ニシテのが野
平野四地女土ニシテたが高隆秀麗ニシテりが
破壊ニシテやが行止退退ニシテもが思慕
ニシテもが戀愛ニシテちが乳ニシテちが地ニシテ
みが暗愚ニシテてが屋建ニシテりが調代濟度
ガ女口メ

中心の一点を帰入することによって、
大宇宙全体を、一個の統一体として、
把握することができるようになる。
（幸.137頁「唯一点」云々を参照）

みたまのつりにおける
アマノミナカヌシノ
オホミカミの
先祖諸魂の
慰霊のやり方

沼田代前生の父母祖の京の魂
縁由諸有諸魂
㊟㊥代前生の父母祖の京の魂
㊟㊥代前生の父母祖の京の魂
縁由諸有諸魂
㊟㊥代前生の父母祖の京の魂



この丸と点は
大宇宙と点はその中心を示し一点を出でて一点
に入るを繰かえしております。

旨得解脱

阿々日賀一点昭々瑯々

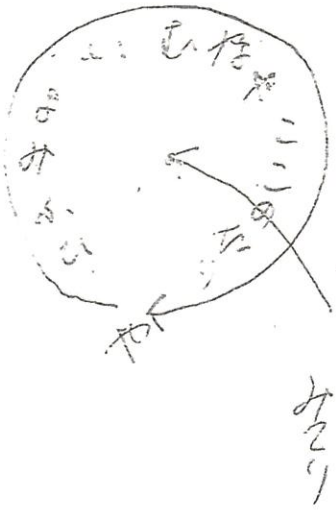
（毎月のみそぎの時は）
西の海大海原の沖の瀬は
汚れを被う磯の荒波

（夏越しの祓は）
水無月の夏越しの祓一する人
は千年の命延ぶと云う

名前の書き方は名前のと書いて
頂くのがよいと思っております。

記入方法
心身を清澄にして
筆に受火
二十一秘言をとなへつつ

ひふみよいむなやここのたりや
ももちちみてり



紙に受火した紙を当て
目の上にかかげ、フッと
息を吹きつけ、諸魂を
一点帰入させる。

カズの起源

人間に「数」が有る。数の運用に依って他の生物に優る生活を営み、文化を築く。此の数はどうして起ったのか。

私どもの言論行為はすべて、自分自身から起る。自分自身の組織に基いてそれが、そのまま外に現はれる。従って「カズ」もまた、自分自身の内に在るものが、外に現はれたことに違いはない。

さて、自分自身を省察するに、最初は、漠然と見て「一つの魂だ」とするその「一魂」を分割するとして、初は二分する。更に二分し、又更に二分し二分して窮極に到達するとする。けれども、その窮極と呼ぶものが、果して有るであらうか。恐らく、有るであらう。が、また恐らく、無いでもあらう。想ふに、「窮極」は、無くて有るので有って無いのであらう。このことは、この「一魂」を累積し累積して、有らんかぎりを累積し盡したとした場合もこの分割し盡した場合同様、それが、有るでもあらうし、また、無いとも言へるであらう。で、このやうな状態は「有なる無」でもあり「無なる有」でもある。

両様の表現をするのは、分割し盡したと見た場合は、「無なる有」で、それがまた、「有なる無」だとも言ふべく、累積し盡したと見た場合は、「有なる無」で、また「無なる有」だと言ふに當る。それは、説明の便宜で、詞を変へるまでで、事実は、ともに、○と描くべきである。つまり、「無い」のである。けれども、頑空・絶無ではないので。また、「有る」のでもある。それは、計算の場合に、○は零で、数としては「無い」と算へるが、もしも、これを取り除けば、「位置」がわからぬから、計算は成り立たない。で、この、「零」は「無いものであり、有るのでもある。」これを古典には、「高天原」とか、「虚中」「虚天」などと記してある。が、共に、それは、「神の生れられる所だ」とあるから、実に面白い。

さて、この「無」即、「零」だが、これは、全宇宙の一切合切を包括して居るのだから、勿論、一切の数は、此の中から生れる。「一二三四五六七八九十百千万」等、皆然うである。仮に、譬へで言ふならば、「零」は空間で、「数」は物体と言ふことができる。空間が無いならば、物体の存在を認めることはできぬ。或は又、「零」を大海に譬へるならば、「数」は、そこに游ぶ魚とも言へる。この場合の空間や大海は、明に、物体や魚類を産出する母胎であると同様に、この「零」も「数」を産み出す母胎である。

ところで、この「零」だが、これは一切合切の数を産み出すのだから、最大の数、或は超絶的実在で、「計算を超えた・計算に上らない・数と名づけることのできぬ数」などとでも言ふべきである。と同時に、分割し盡した最小のものが「零」だから、これは明に大きいとか、小さいとか、多いとか、少いとか、計算することのできぬ「窮極」である。

すると、「窮極」はやはり「実在」のである。その「実在」とは、即、「一」である。

「無」と見たときには、「零」であり、「有」と見た時には、「一」である。そのもの自躰に変りはないが、それを観る人の異るばかりに、「その名が変る」。さうして、これは、すべてを産出するのだから、同時に「重重無盡無量」である。

そもそも、「箇躰」の成り立つには、「種子」が無ければならぬ。その「種子」は大きい面から観れば、全宇宙神であり、小さい面から観れば、最小の「種子」である。この最小の「種子」が、最大な全宇宙神の「力」に由って、旋回し統一し、重なり重って、各自各箇各箇の存在を示す。

ここで、まことに奇妙で、最も重要で更に、修行者の誤解し易い、二つの問題を指摘しておきたい。

その第一は、最大としての「零なる一」は、全宇宙を包括してゐるのだから、「二、三」と殖えようはないと思はれ易いが、この場合は、最大なる一が割れて、二、三、四、五と別れてゆくのだから、数として見れば、それが、つまり、増すと言ふことになる。分割されるから減るのであるが、反対に、数は増すのである。それだから、この全宇宙を数として、一と見れば一であり、二と見れば二であり、三と見れば三。四、五、六、等と見れば、皆共に、そのそれぞれなのである。

第二の問題は、この「零」即ち「○」を重重無盡と見た場合、「その各々は決して同一ではない」と言ふことである。譬へで言ふならば、箇躰箇躰を人間として見るならば、すべてが人間である。けれども、分けて見れば、男女國籍老幼の別は云ふに及ばず、その言論行為の同一な箇躰は何處にも無い。で、その最も異ったところの男と女。それが結合して、夫婦となるわけである。もしも、全然同一ならば、結合の要もなければ、結合することもできぬのである。異るが故に、結合することができるし、結合して、新なる箇体を産出するのである。

さて問題をもとに返して、箇体の成り立つ初めですが、その種子としての○が、内容の異った別の○と組合ひ重り合ふと、勿論、○である。さうして重ると言ふからには、必、重った「点」がある。その重点には、また必、表と裏とがある。で、先づ、その重点の「表」を考へて見たい。

舊約聖書の創世紀に、「神その象の如くに人を創造たまへり」「エホバ神その創造たまへる人より助骨を取りて女を成り」とある。これで、「一」が

「二」になったのだが、ここで重要なのは、この創造には、全宇宙神の「力」が原動力であったことである。

さて、かくて、「成立した」箇躰は、大根本の種子である全宇宙神の「力」と、次ぎの種子としての「男」と、更に、之れと結合すべき「女」との三位一躰である。これを箇躰の位置から見れば、男と呼ぶべき最初の「〇」と、女と呼ぶべき次ぎの「〇」とが結合して、「◎」と呼ぶべき新しい「箇躰」が出来た。さうして、大魔王神力、全宇宙神の「力」が之れを創造たといふので、この「神の力」を、数としての「三」で、「◎」の「重点」だとする。さうして、これを重点の「表」と呼ぶ。と同時に、この創造の「神力」は、必や、破壊をも司る。なぜならば破壊せねば、創造の為ようは無いからである。この破壊の「神力」は、数としての「四」で「重点の裏」で、「全宇宙としての（神魔）の半面と見るべき大魔神力である。

以上で、箇躰の成り立つ原型が整備されたのである。この「箇躰成立の原型」には、さきに譬で云ったところの空間なる外廓の有ること、またもとよりである。この外廓。即ち、大空であり、大海であるものとは、また勿論「母胎」で、その中に、魚の如く、鳥の如く万有と呼び箇躰が生育する。これを数とすれば「五」である。創世紀で言ふならば、エデンの園に、男と女とが、まだ禁断の木の実を味はず、平和に安楽に暮して居る姿である。かくて、「数」は、五で成り立つ。五で足りるのである。それで、「五」を「成数」と呼び、また「正数」とも言ふのである。

物の生を出づるには、先づ、陰陽の合体といふ前提がなくてはならぬ。

動物世界の然る如く、山川草木の世界も、その形こそ異れ、必やまた然うであらう。何故ならば宇宙の眞理は一貫して、変らぬからである。さて、この陰陽を形にあらはせば、凹凸となる。この凹凸を前述の〇の中に納めて見ると◎いふ恰好になる。これが太陽の象形であり、日の字源だといふから、古人の明には今更の如く驚く。陰陽の合体によって生じた物は、又必や陰陽の合体でなければなるまい。何故ならば、人の生める子は人であり、猫の子は猫であり、犬の子は犬に外ならぬからである。繰返すが宇宙の眞理は一つである。

宇宙は、全体であれ、一部分であれ、大であれ、小であれ、一切合切、この◎である。この◎は、陰陽であり、男女であり、神魔である。そこで、美しきエデンの園はまことに神の國である。が、しかし、この神園にも魔が深く潜んでゐる。それに留意せねばならぬ。果せるかな。蛇のすすめに依って、禁断の木の実を食った人間は終生、否、否、子子孫孫に至るまで苦しみ悩まねばならなくなったのである。それで、正数なる五が、実は、その奥深く、この魔を抱いているのである。これが、五の次に来る六である。故に「六」は、「五の余すところのもの」「五の産出するところのもの」であるが、未、箇体をなしていない。即、表面に顕れていない。それだから「零」である。で、これを「六の零」と呼ぶ。颱風の中心は、無風状態であるそうだが、実によくこの「六の零」を現している。この六は、五の制御力が緩むとすぐ暴れ出すから始末が悪い。これが「七」で、「ナ」である。七は勿論颱風そのもので、菜とか、名とかの如く、多数であり、我等の周辺である。しかし、颱風が永久に吹いてはならず、人間が何万年も生きてゐても困るし、草木が何億年も生えていても始末が悪い。始末が悪いどころか、それでは固定で、膠着で、無限に流行転換する宇宙の事理に反するので、これは適当に殺されたり、又活されたりする。

この殺活の妙用を司るのは「八」である。八は「ヤ」で、「矢」である。出でては帰り、帰りては又行く。即、天界にも地底にも自由に出入往返する。この「八」の働きによって、宇宙の万有は整理されて平衡を保つ。この八の活用に依って整理された数が「九」である。その最も好い例は地球である。そして、数の段階はここに窮る。で九を窮数と呼ぶ。九は「コ」である。

「コ」は八に依って生み出された兒である。この「九」をまた「ココノ」と数へる。「兒兒野」で、窮数として、総べてを攝理したのである。日本語で数を算むに、「ヒフミヨイムナヤコト」と呼び、また、「ヒフミヨイムナヤコ（一二三四五六七八九十）コノタリヤ」とも呼ぶのだから、九の次の「十」は、「ト」であり「タリヤ」であり、完全円満に具足したので、天界と地底とを一周し得たので、満数と呼ばれ、神人と称へられるのである。「タリヤ」の「タ」は、「足り満ちた」との音義であり、「リ」は、調伏濟度の音であり、「ヤ」は、終止符であると共に、前進上升の義である。つまり、出入往返である。それで、十は、「一二三四五六七八九」が完全に統一し、元の一に帰ったと言ふので、所云、「九魂統一、十魂尊貴の玉躰身」なのである。

これが日本民族の承け得て来た「神数観」の概要である。

「唯独」。我「唯独」。万人悉皆。
親健。兒孫蕃蕃。稔豊穣

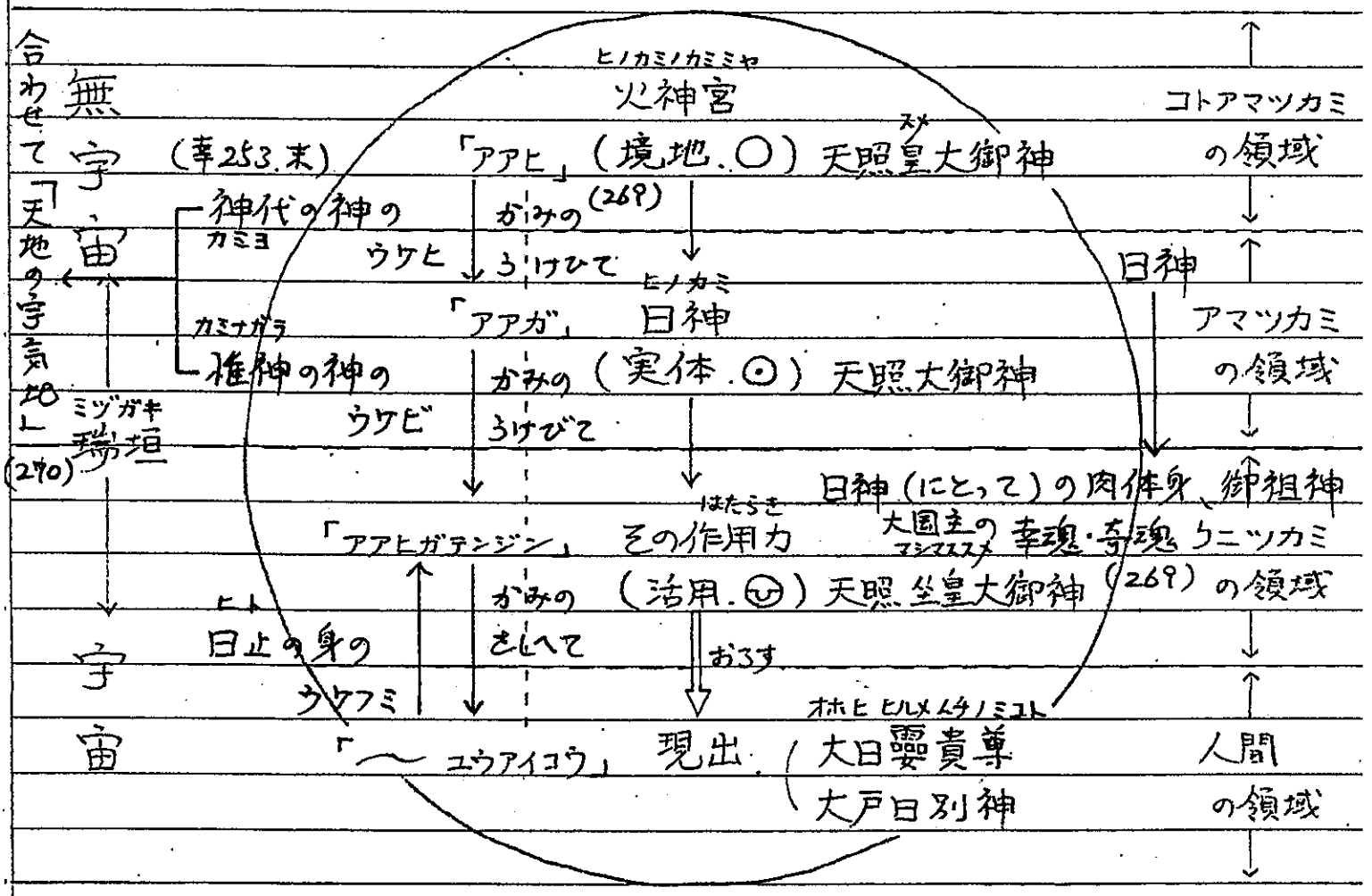
昭和三十一年十月三日

（「未来誌」より）

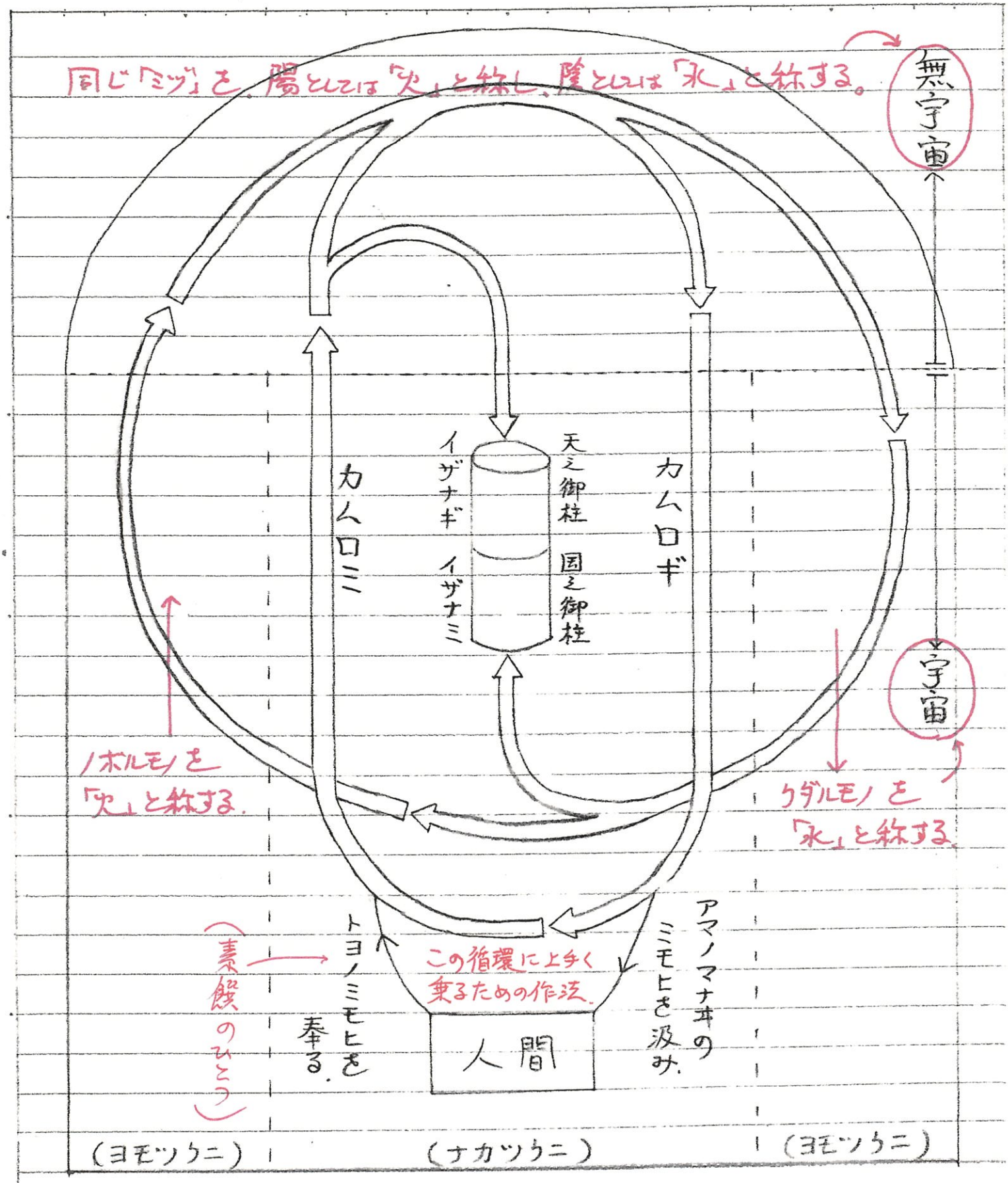
2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

（あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、日神（ヒノカミ）の作用力（はたらき）は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。）



ミイヅ 循環図


同じ「ミヅ」を、陽としては「火」と称し、陰としては「水」と称する。
無宇宙
宇宙
カムロミ
カムロギ
イザナギ
イザナミ
天之御柱
国之御柱
ノボルモノを「火」と称する。
クダルモノを「水」と称する。
トヨノミモヒを奉る。
(素餐のひとつ)
アマノマナ井のミモヒを汲み、
この循環に上手く乗るための作法。
人間
(ヨモツクニ)
(ナカツクニ)
(ヨモツクニ)

NO.
DATE

ウケヒとウケビとウケフミ

幸253頁で言う「神代(カミヨ)の神」とは、無宇宙の零(ヒ)の神(カミ)のこと。

即ち、コトアマツカミとアマツカミの総称。言い換えれば、

この宇宙(時間と空間)が始まる以前から(最初から)

存在していた神のことである。

また、「惟神(カミナガラ)の神」とは、零(ヒ)がカミナガラに(大宇宙の

大中心の命(オホセ)のままに)結ばれて生(あ)れましたウニツカミのこと。

「日止(ヒト)の身(ミ)」であっても、カミナガラにウケフミ行けば、

『神の宇気地(ウケヒ)に依(よ)りて、神の宇気毘(ウケビ)を得る』ことができる。

即ち、(無宇宙の側にある「元型」に従って)神身を築き、

みずからもまたウニツカミの一員(人(ヒト)の身ながらの神(カミ))と

なることができるのである。

なお、秘稿「教受寮の講話」にも、『この神人出生の神儀

行事をミソギと称して、祓禊(ハラヘミソギ)と呼び〜』とあることから

解るとおり「ウケフミ」とは具体的にはミソギ行事のこと

KOKUYO

である。

別の秘稿にも『日神(ヒノカミ)の神言霊を称へつつあれば、人の身ながら神の身と成るべきなり』とあるので、言霊奉称行(コトタマぎょう)もまた、そうしたウケフミの一環であることが解る。

ノリトで「豊明(トヨノアカリ)は神ながらの火」と宣(の)るのも、そのロウソクの灯(あか)りを「無宇宙の零(ヒ)がそのままに結ばれて出来た火(ヒ)」だと観念することが必要だからである。

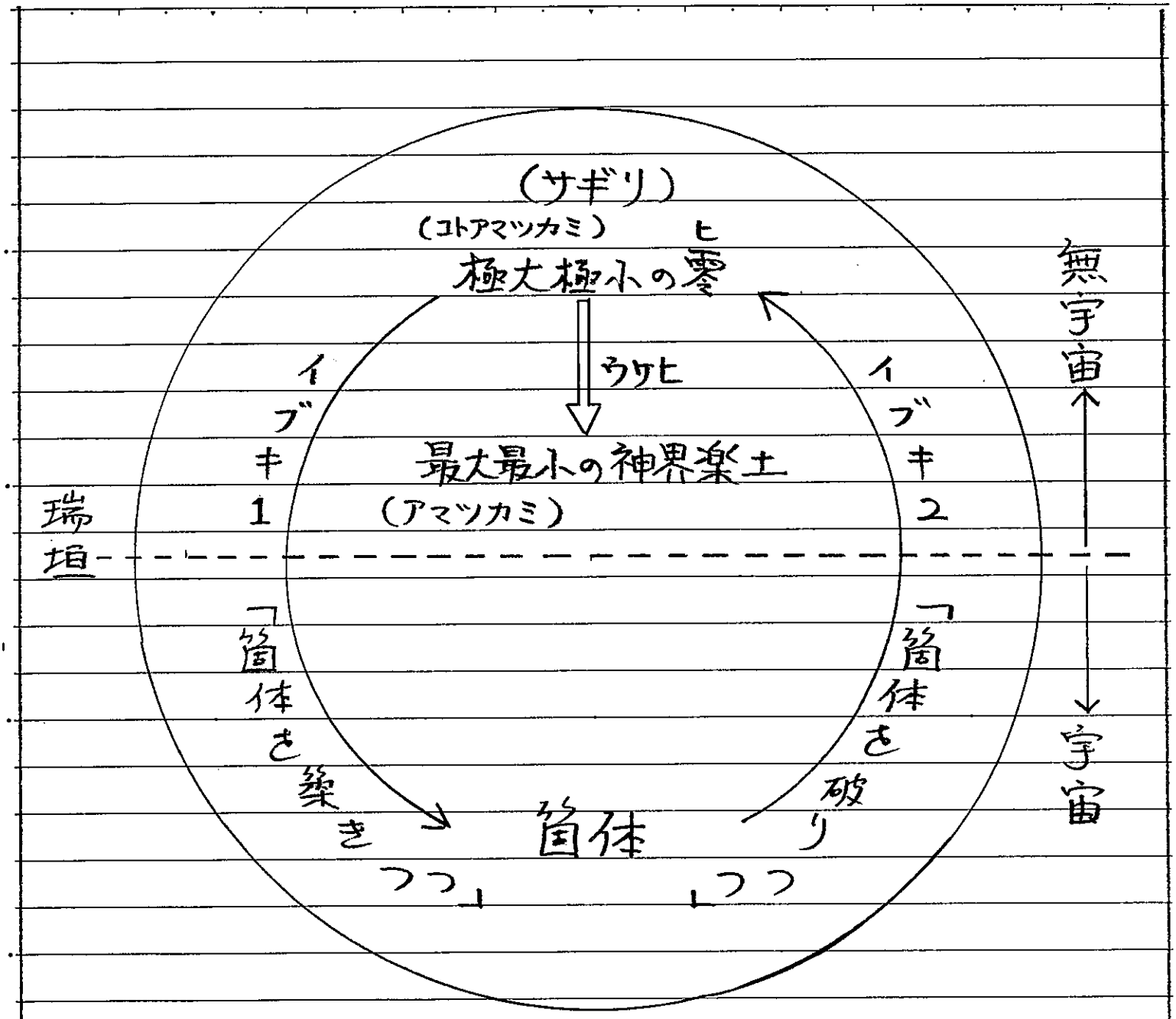
そうしたカミナガラノヒによって祓(ハラヘ)を為(な)し、禊(ミソギ)を為(な)し、コトタマを奉称することが、即ち、ウケフミとなるのだ。

神身を築く際(に)しては、同時に自分なりの神界を築くことが必要であり、そうした神界は、イウラエヤやアウラエヤの「ラ」に相当する。

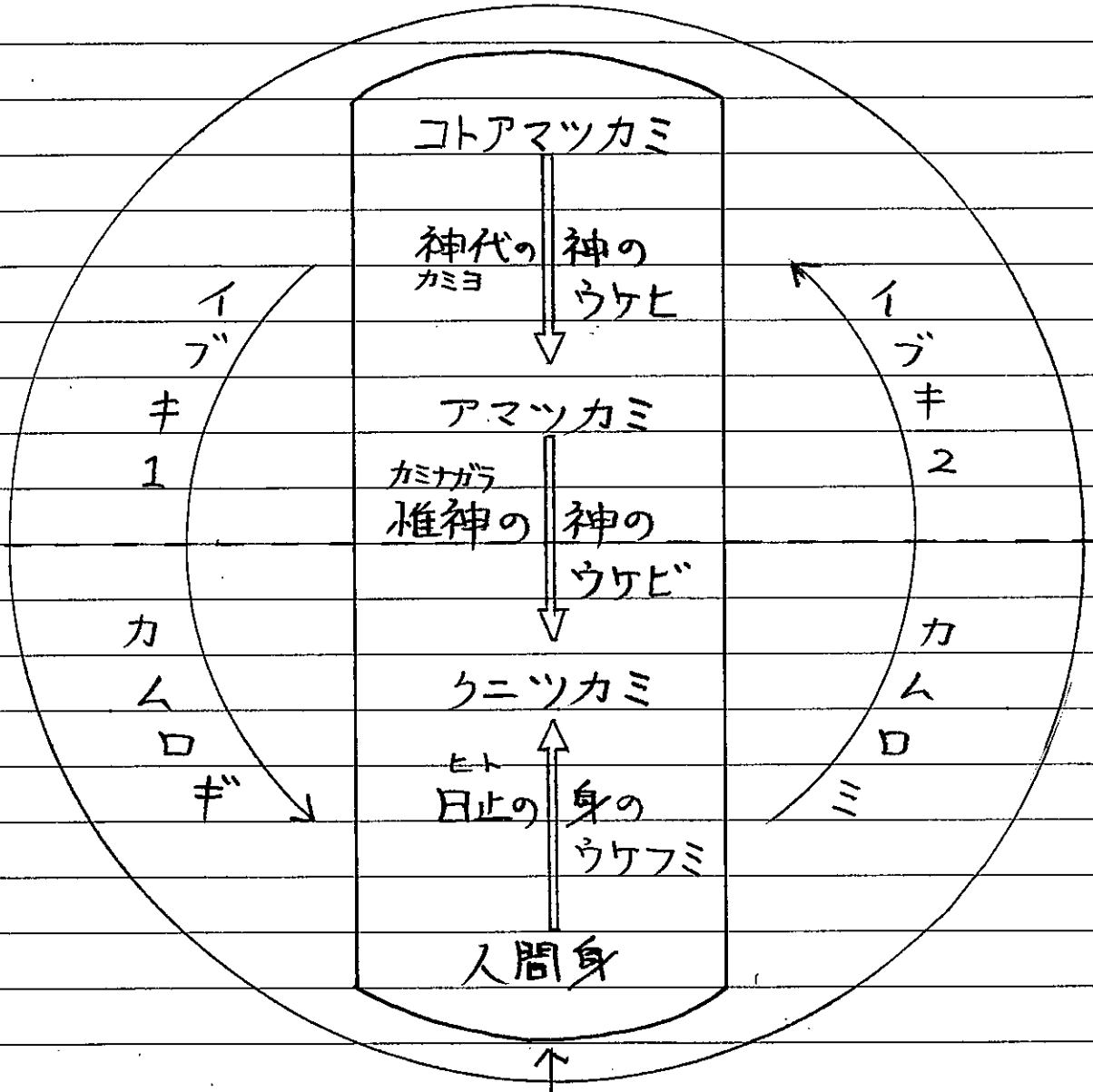
その意味において、ウケフミは決して「それらのコトタマと無関係」という訳ではないのだが、それでも、本来的には、ウケフミは「特定のコトタマと特別の関連性を持っている」という訳ではない。

ウケフミとは、より一般的な意味で「神の宇気比(ウケビ)を得て神人(カム)と成るための、準備行為」全般を指す用語であるものと考えた方が良いだろう。

ウケヒ．基本図


（サギリ）
（コトアマツカミ）
極大極小の零
ヒ
ウケヒ
最大最小の神界楽土
（アマツカミ）
イブキ1
イブキ2
瑞垣
「箇体を築き」つつ
「箇体を破り」つつ
箇体
無宇宙
宇宙

ウケヒ、発展図



こうした「一連の正しい筋道」それ自体を指して、

「カミナガラ」と言う。

▼彼らは、要点のみを、ズバリ、ズバリと示して居る。その短い言葉から、歌詞の意味をきめるには、ここに掲げたカムヒビキのみでなく、他の場所で示して居るものをも参考として、彼らの用語になれ、カンを以て、くみとるようにした。

〈ヤホ　ヤチホ　ヤサカ　マガタマ〉

とは、「タカマクラ（宇宙球）は、始端と末端の極限が永遠的に循環して居る」という意味で
あり、ヤホヤチホとは、数としては八百八千であるが、ヤは極限を意味し、天体に於て、生
成、分化、親和、還元、極限、循環の変遷が、無限的にくりかへされて居る状態を表はして居
る。通例マガタマと言ひ習はされて居るが、実は「アマとカムのフトマニのタマ」の意である。

〈アメ　アマヒ〉

とは、「宇宙の諸天体も、アマの微分されたアメから生成されたものであり、その発生源は
アマヒである」といふ意味である。

▼アマ　については屢々述べて来たが、要するに、アマとは、「アらゆるもののハジマリ」として、カ
タカムナ人が直感で感受して居た「始元の量」であり、それが、すべての現象事象の起源の「元」であ
る。アマは、「目に見る事は出来ぬが、すべてのものを生み、育て、そして又、すべてのものがそこに

相似象より

還ってゆく」といふ思念である。しかし、それだけなら、一般の神仏、創造主等のイメージと変らぬ、天地創成説の一種にすぎぬようであるが、カタカムナ人のサトリは、それが単なる観念上の想像から出たものでは無く、確かに体覚的に感受できる「潜象の存在」である、といふ直感が基になって居り、彼らは、そのアマが、微分された「アメ」の状態で、宇宙の全域（アマ界全体）に、密充塡的に敷かれて居る様相を観じ、又、そのアメの濃淡からウヅマキ流が起り、光以上の超高速で、大宇宙空間に波及する力を、直接に〈アマハヤミ〉として感覚して居た。又アマの微粒子「マリ」は、変遷して、サヌキ（男電気）とアワ（女電気）の電気粒子となってマクミ（磁気）やカラミ（力）を現はし、又、すべての物質の中に入りこんで、例へば原子核や細胞核のようにその生命を支配し、又、アマウツシの実体として、自分たちの身心に、絶えず交流して居る、と観じて居た。そういふ気持が伝統となって、日本語では〈アマ〉といふ言葉で、「アマ始元量」を表はすと同時に、女性もアマであり、天も海もアマとよんだのであらう。カタカムナ人は、アマを空間的にとらへる時は〈マ〉と言ひ、個々としてはマリである。従ってマとは、個々のマリの集団系をさすと共に、それを生む空間、（アヒマ）でもあり、言ひかへれば、トキ（時間）とトコロ（空間）の発生源である。

〈アマ〉は宇宙球（タカマクラ）全体に遍満して〈マ〉を構成する始元量であり、〈アメ〉はその微分を示し、〈マリ〉はその結球を意味する。それは、目に見えぬ潜態のまま、左マワリ右マワリに旋転しながら運行し（マワリテメグル）集合したり融合したり重合したりして、〈マ〉全体に渦巻いて居る。

そして、宇宙の環境条件に応じて、マリは電気粒子（イカツ）となって「現象界」に表はれ、磁気や

力の位相を有ち、モコロを構成し、次第に、目に見える諸現象、則ち、天体や、天体上の諸物質をカタチづくる「元素」へと、変遷してゆく、と観じ、それらの様相を述べて居るのが、私達が「カタカムナの直観物理」とよぶものである。彼らは、潜態の中に更に、根元的なアメとマリを、感じ分けて居る。

▼カタカムナの文献には、他の民族の古代文字に多く見られる、商業の契約や、戦争の記録、又はウラナヒや呪詛的なものは全く無く、彼らの直観した〈イノチ〉のサトリと、そのサトリに基く〈クラシ〉の知恵が、イキイキとうたはれて居るのである。

▼〈アマヒ〉とは、「アマのヒ」といふ事である。〈ヒ〉とはモトを示す、元とか玄とか源泉（カミ）といふ意味のヒビキである。従って、アマヒとは、すべてのモノを形づくる根元（ヒ）であるところの、アマ始元量そのものを指すと同時に、更にそのアマのモト（カミ）則ち「アマのヒ」を指向する思念を含んで居る。

ひのかみのかみわざ

火神事

多田山谷祕稿

○尸祝。ハフリ。

支那文字に尸祝と書きたるを「ハフリ」と訓む。

齋儀職員の称にして死者を齋奉り祭り奉る職名なり。

轉じて神事に仕奉るものの職名となり、祝の一字のみを充當てても「ハフリ」と訓むなり。

〔朝羽振夕羽振なる語を柿本人麻呂は用ゐたれども、尸祝の文字とは全く異りたるものなり〕

祝（ハフリ）とは葬にして葬るにして死者をして完全に消散滅盡せしむる祕儀密事なり。

「ハフリ」の「ハ」は葉國の「ハ」にして分れたるなり。

「フ」は経過なると共に二なり。分れて結ばんとするものなり。

「リ」は調伏濟度の義にして修理（すり）なり。

故に「ハフリ」とは分割又分割して其の極に至らしむる祕言靈なり。

○朝夕。アサユフ。

萬葉集時代には「アサヨヒ」とつづけ「アシタユフベ」とつづけて「アサユフ」とは云はざりしなりと加茂眞淵・山田孝雄等は云へり。

假名書には「アサヨヒ」とのみありて「アサユフ」の例を見ざるが故に「アサユフ」とは云はざりしものと思はると論證せるなり。

されど、之れでは唯唯先例に準[redacted]據すべしと云ふもので正邪曲直善惡美醜の判別ではない。

〔アサハフリ　ユフハフリ〕と柿本人麻呂は用ゐて「アサユフ」の用例を遺して居る。

奈良朝爛熟時代となっては言語も急激なる墮落を来し、惟神を「加牟奈賀良」と云ひ、朝夕を「アサヨヒ」と云ふが如く変化したのである。

三重の子が
有衣の三重の子が
今朝珍らしく
三重の子が
照りたる見れば
天地は今ぞ剖るる
今ぞ發くる。

三重の子が
指す玉椀に有衣ぞ
三重重ねたる。
あちめ。あちめ。

有衣の三重の子が
指す玉椀に受けしあちめ。
有衣の照りにぞ照れる。

有衣の三重の子が
稜威玉椀に受けしあちめ。
落ちもせに
皆こをろこをろに
高光る日御子。

さす竹の三重の子が
くれ竹の節面白く
たしみ竹たしみて充てん
三重の子が儀がせる

稜威玉椀に受けしあちめ。
落ちもせに
皆こをろこをろに
高光る日御子。

赤珠は緒さへ光れど
白珠は衣に縫へども
五色の光は指せど
烏羽玉の鵜の羽衣
往く人の闇は綾無し
来る人の何か挿頭せる。

人皆は往き還りつつ
人の世を神代とすべく
人皆は神と成るべく
神ながら
神のまにまに
神知らすまに。
あちめおおおお。

ツクバネノ　ミネヨリワキテ
ミナノガハ　ヒツキヘダテズ
オトノスミタル。

以上　昭和十年七月三日

大正人道教主人

多田山谷祕稿

大正人道教主人とは直日にして、國家にありては國主なり國王なり國君なりにてましますなれば、家庭に於ける戸主なるべく、組合に於ては組合長にして會社にありては社長なり、會長なりにして、世界人類としては釋迦なり、基督なり、天照大御神なり、天帝なりにてましますなり。

其の故は、生死遷流しつつ生死遷流を知らざるが故にして、天命なり、美固止(みこと)なればにして大宇大宙のその相（すがた）なり、その事理なるなり。

然れども、人の身は箇體として限られたる世界に生活するが故に、其の身の来由を知らず、往路を辯ぜずして、箇體に執着し、見聞し得る範囲に於て目的標準を定めんとするなり。

於此か、所謂、偶像を目標とせざれば確實感を得難くして、人爲の對照體を求めて初めて安心立命を得たりとなすなり。

佛像佛画の本尊と称し、神像神體と称するものと共に、天皇と称するも亦然るなり。

大正人道教主人とは神直日なり。

而して、靈にして、魂にして三にして、二にして、一にして日にして、月にして、日月にして、四象にして、両儀にして、大極にして、無極にして、極無極にして、如是なり。

メにして、ヒにして、フにして、ヒメにして、ヒコにして、ハルヒヒメにして、⁂にして十種にして、三種にして、一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。

之れを人天萬類の基準となすなり。

否、基準なりと知るなり。

ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ。

アアヒガテンジンユウアイコウ。

十年依然梧下蒙
三日忽然高峰櫻

さくらばなさきのさかりをあまをとめよにさちあれとあさつとめする。

寫経一巻

あちめあちめあちめあちめあちめ。

寫経一巻

朝陽図一幅

ちちははみおやみおやみなともにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。

あすばかすやぞ。さからかすやぞ。

おおおおおおおおおおおお。

ああひがてんじんゆうあいこう。

◇

今日今時人不来
風塵掩空日光不明
虚名徒毒於世間
三年不鳴鵬雛情。

つるのこのそのひとこゑはそらたかくけふほがらかにひびきわたれり。

◇

山の井の筧の垂氷今日解けて蕨萌えたり陽炎のして。

昭和十二年四月八日　木曜日
晴　後に薄曇。

昨夜東海漁翁之嬢子来云。

我是第三神界主神之女也。

今日以後願侍於後宮。

紫の縁由たづねて人ぞ寄る今日をば八日と神の治らして。

ああひがてんじんゆうあいこう。

よし。

まさかきはいろうつくしくなつやまのしじにしげればよしとこそのれ。

ああひがてんじんゆうあいこう。

はるひめはるひめはるひめ。

ああひがてんじんゆうあいこう。

あさもよし。きのべのみやと。かみのうけひて。かみのうけびて。かみのをしへて。かみしらすまに。

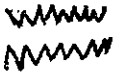
あさまやま。

ひとこそあふげ。

いつもいつも。
ひとこそはみよ。
けふけふと。
あさひはひかり。
ゆふひはてれり。
やまとには。
うづのみたから。
かみのことばの。
さはにこそあれ。

朝もよし城の上の宮と神の受氣比て神の受氣昆て神の教へて神知らす遜邇。

昭和十二年四月九日　金曜日
夜来の雨止まず甚寒し　乾風。
ひくまののしほくむをみなとこよにもきみきまさめとひくまのの。
あちめおおおお。
よしあしのへだてもあらずあをみたるひろのせましとよしきりのなく。
ひ　ふみ。
ひ　ふみよいむなやここのつとをよ。
あちめあうを。
よし。
固の支那文字を見よ。
□古にして□□十にして㊥にして凝固の形象なり。
而して結實なり、結晶なり。
産靈にして産魂にして魂にして、結び止めたるなり。
十なる□の蒐集したる□なる固なると共に、□に宿りたる古にして、根本魂と外郭身との團結體を指事したるなり。
之れを兒なり子なり孩なりとなす。
兒は儿なる人の宿るところにして宮なり。
子はかがまりたる人なり。
他に依據するものなり。
孩は子女の未自立し得ざるものにして、唯其の核在るのみなりとの義なり。
常陸國に小田と北條との二村有り。
鎌倉時代より今に至るまで相鬩ぎ相争ふて止まず。
北條の水を小田に分たず。
小田、之れが爲に耕耘にたへず。
仇敵境界を接するを亥と云ふ。
孩の図



之れを八八と云ふ。
母胎に住み母血を吸ひ母乳を呑み、母を食料として生活せるもの即、孩なり。
而して母は之れを喜び、之れを愛撫し、之れを養育す。
これをマンコと云ふ。
七の妙用なり。
カミヨは七にして五にして八にして百にして千にして萬にして一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。
之れをチチハハと呼び、ミオヤとも、オヤとも称へまつりてアメツチノカミワなる資料なり財貨なり。
あちめあちめあちめあちめあちめ。
ああひがてんじんゆうあいこう。

大正人道教主人（三）

多田山谷祕稿

ミイヅとはミヅであり、ミモヒであり、ミナノガハであり、アマノマナ井であり、ヨルダンであり、イソノであり、ソノであり、イツカシガモトであり、アチメであり、アメツチノウケヒであり、アスバカスヤゾであり、サカラカスヤゾであり、サワラビであり、サヤサヤであり、サザナミヤである。
ササノクマヒノクマガハニコマトメテシバシミヅカヘカゲヲダニミンでもある。
之れをヒでメでヒメでウケヒで雪の山の解けて流れたる噴泉なり、泉なり、伊頭能實なりにしてミコトなるノリトなればウタなるなり。
伊頭能雄健・伊頭能雄誥・伊頭能雄走なりとはなすなり。
ミにしてヨにしてヒフにしてフにしてヒフミにしてヒフミヨ

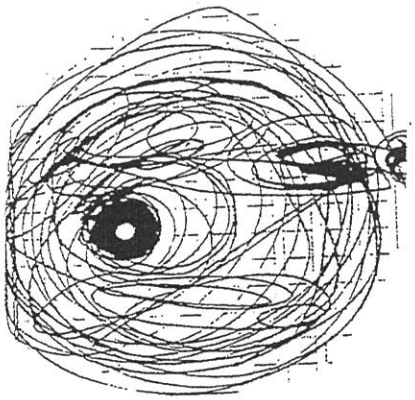
イムナヤココノツトヲヨにして
チチにして八八にして産霊にし
て産魂にして魂にして零にして
基準なり。
天命にして命にしてイノチに
してミチにして天地一貫の大道
とはなすなり。
◇
昭和十二年四月十一日
日曜日　快晴　静穏
午後
鈴木東作氏来る。
郷里隣人の歸正立道行により
屋内に在りて太陽を拜し得らる
るに至れる趣を語り、和歌あや
め草を乞ひて歸れり。
あやめぐさあやめづらしきき
みがやどひとこそつどへひとを
さそひてけふけふとあやにめで
つつあやめぐさ。
◇
昭和十二年四月十二日
月曜日　曇晴曇
微雨ありしも濡るる程には降
らず。
午前十一時出發、内務省に行
き、高田装束店に獅子圖制作の
下仕事を急がしむ。

宮地直一博士獅子圖下書を乞
へるにより使用後に贈ることを
約す。
獅子圖浄書用の金泥一分と羽
箒・膠鍋等を求む。
購入費金参圓四拾貳錢にして
前回分を合すれば五十参圓七拾
錢なり。
此の他に紙壱圓七拾貳錢とす
れば金五十五圓四拾貳錢にして
五十五〇四十二にして、五十五
は天地合体の數、四十二は陰陽
分立の數にして奇妙の靈異數な
り。
〇は基準にして有用の無用に
して、55・42と書けば・は
〇にして、〇以上の55、〇以
下の42なることを示す。
従て之れを別くれば五五・〇
四十二にして、五五は顯數なり
表數なりにして、四二とは裏數
なり幽數なるべし。
故に五十五は地上に在り、四
十二は地下に在るものとも云ひ
得べく、地平線は〇にして、あ
るいは點にして、物無くして物
有るの義なれば、厚みなく幅な
く廣さ無くして長さのみ有るの

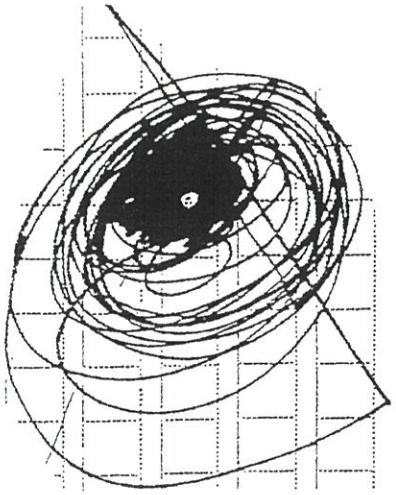
線、厚みも幅も長さも無くして
唯位置のみ有るの點、厚みも幅
も長さも位置も無くして唯在り
と知るの面、之是神籬にして磐
境にして天津神籬・天津磐境に
して、劔戟杖矛にして、八握劔
にして、十種神寶にして、三種
神器にして、八咫鏡にして、在
るかぎりにして、無にして、火
にして、最小にして、最大にし
て、ヒにして、ヒカリにして、
ヒトなるなり。
人なるなり。
故に云はく。
天とは直日にして八十直日に
してして大直日にして神人にし
て日止にして火人にして皇玉に
して璽にしてミシルシなり。
人間身にてはましまさぬなり、
さればこそ天皇は神（カミ）
にてましますなり。
直日は神（かみ）にてまして
すなり。
而して直日の人は神たる人な
ればとてカムと称するなり。
カムなりとは、晃耀赫灼の力、
蒐集収納して脱出することを許
さざるムなる二音合成して「唯

光のみなり」との義なり。
カミは天地團成にして、カム
は人間身にして、光にして、世
の光たるものなれば、カミとカ
ムとの相違は、人間世界にて思
ふが如き通音なり音便なりとし
て、同一視することを許さざる
なり。
加美の代に我は遊べり今日今
日と人を誘ひて我は遊べり。
天地の加美の心を人の子に教
へて行かん人の身ながら。
ああひがてんじんゆうあいこ
う。
昭和十二年四月十三日
火曜日　晴
未明發汗、寝具をしぼるばか
りなり。
其の何の故なるやを知らず。
然り。
其の知らざるはカミにして、
其の知るものの知らずして知れ
るはカムなり。

之れを見よ。
三年を過ぎたるものを頃者と云ふ。
海中に沈みて可怜道有りと云ふ。
然り。
之れをウミなり。
人間目睹せざるウミなり。
種子の発芽。
種子の保存。
稲や麦の種子にても幾年乃至幾十百年を保存し得べしと云ふ
ミチの種子が幾千萬年、否否時間を忘れ、空間を忘れて、否否、時間も空間も共に自己とし、否否、其の自己をも捨てて時間も無く、空間も無く、無始終に存在し、存在せりとも思はざるは又、自然るべきではないか。
其の
シホツチノオヂ。
ワタツミノイロコノミヤ。
ミチ。
マナシカタマ。
ホホデミノミコト。
トヨタマヒメ。
ワタツミノカミ。
とは何如。



の如きは火火出見尊。
故に、ホホデミノミコトとは火にして、點にして、日にして日神なるヒカリなり。
⊙なるなり。
イロコノミヤとは妖魔を調伏済度したる浄地にして、空界なり。
マナシカタマとは、



図の如くにして、シホツチノオヂなり。
主神を認めたる浄地なり。
されば、ワタツミノイロコノミヤとは主神有る浄地にして、其の主神とはホホデミノミコトにして、主神と境地との不一不二なるをシホツチノオヂとも、マナシカタマとも称して、オホヤマトスメラギミとたたへまつるなり。
大直靈神なり。
ワタツミノカミとはウミの神にして、浄土の主なるアマノミナカヌシノオホミカミにして、アマテラススメオホミカミなり
ワタノハラなり、ウナハラなり
アマツイハサカなり、メなり、女なり、陰なり、母なり、胎なり、胎盤なり、佛盤なり、湯なり、湯盤なり。
日新又日新なる無の有なり。
岱なり。
泰にあらざる山なり。
山ならざる山なれば海なり、東海なり。
之れをミチなり、トヨタマヒメなりと云ふ、ヒフミにして、ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリなり。
或時は人驚かす案山子かな、と云ふ句がある。
靈念思考と魂と直日と直靈との異別を知らねばならぬ。

或知古老苦心刀痕
又見雪山捨身行
人間本来一點火
火聚又是非火聚。

弾く汐の潮のまにまに引くからに亦満ち満ちて月圓なり。
阿知米阿知米阿宇袁。
宇。宇。宇。宇。宇。止。宇止。宇。
はるひひめはるひひめはるひひめ。
ああひがてんじんゆうあいこう。
う。う。う。う。う。と。う。
う。う。
うと。
うとのみや。
うとのみやしろ。
うとのかみみや。
うと。
う。う。う。う。う。と。う。
と。う。
うと。
う。

No.

Date

「月神事」と幸、19頁の用語、

無宇宙	第一魂（直日）	（数理では「五」㋑）	ニギミタマ 和魂 ミタマ（御魂）	アマテラススメオホミカミ 天照皇大神
ミヅガキ 瑞垣				
宇宙の第一階層	第二魂（霊）	㋺～ 合わせて、	クシミタマ 奇身魂	合わせて、
タマガキ 玉垣				
宇宙の第二階層	第三魂（念）	「ココロ 霊念思考」	サキミタマ 幸身魂	月夜見月弓月読命 ツキヤミツクユミツキヨミノミコト
ナカガキ 中垣				
宇宙の第三階層	思考		マミタマ 真身魂（川面用語では「まかみたま」）	
アラガキ 荒垣				
宇宙の第四階層	身体	（肉体身）	アラミタマ 荒身魂	タケハヤスサノヲノミコト 建速須佐之男命

一體だと云ふので、生産靈だけの生産靈無く、足産靈だけの足産靈と云ふのも無く、玉積産靈だけの玉積産靈と白すことも、勿論有り得ない。唯、其の位置を異にして居る人天萬類は、相對的に人天萬類を觀るので、其の觀點を異にする上から名を別けるまでのことである。共に「カミ」で、◎で、三不可分の一と呼ぶのである。三にして一、一にして三、如此に、日本民族は、神の內容を學び來たつたのである。日本の古典中では、祝詞式に、此のことを能く傳へてある。

三不可分の一を、人類世界にては、太古以來、⊙と描き、日と稱へたので、日本民族は、特に、天照大御神と拜みまつるのであります。人天萬類の出でては歸る根本本體で、開きては、大宇大宙として、天御中主神と稱へ、結びては、百八百萬魂神と白しまつる。暫も離るることのできぬ、大本つ御祖にてましますから、同時に總べてのものの等しく據るべき標識基準である。そのように、標識基準と仰ぐは、私どもの出でては歸る唯一點である。

此の一點は、我が身の上では、直日と呼び、一家としては、家長と稱し、人類世界では、天皇と稱へまつり、人天萬類は、◎と仰ぎまつる。

此のを◎仰ぎ、此の天皇を載き、其の家長に從ひ、各人各自に、各人各自の直日を發き來らば、其處は高天原と稱へて、天照大御神の知ろしめす神界であることを、各人各自に知るのである。其の業こ、各人各自は、八百萬魂神だと、古典は教へてある。其の八百萬魂神たる實を顯はす

チチハハ ミオヤミオヤナベテノヒトビト。
ワガサキヨリ チチハハ ミオヤミオヤ。
ワレニユカリアルナベテノヒトビト。
ミナトモニサトリサトル・サトリサトレバ
アマネクヒトツナリ。

天照皇大神宮

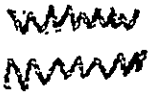
アマテラスオホミカミトタタヘマツルナリ。
ツキヨミノミコトトタタヘマツルナリ。
タケハヤスサノヲノミコトニチマシマスナリ。
オホヤマトスメラギミニチマシマスナリ。
カミトコソハタタヘマツルナレ。

山谷 多田雄二先生の筆跡

チチハハミオヤミオヤのノリトの説明

固の支那文字を見よ。
□古にして□□十にして㊥にして凝固の形象なり。
而して結實なり、結晶なり。
産靈にして産魂にして魂にして、結び止めたるなり。
十なる□の蒐集したる□なる固なると共に、□に宿りたる古にして、根本魂と外郭身との團結體を指事したるなり。
之れを兒なり子なり孩なりとなす。
兒は儿なる人の宿るところにして宮なり。
子はかがまりたる人なり。
他に依據するものなり。
孩は子女の未自立し得ざるものにして、唯其の核在るのみなりとの義なり。
常陸國に小田と北條との二村有り。
鎌倉時代より今に至るまで相鬩ぎ相爭ふて止まず。
北條の水を小田に分たず。
小田、之れが爲に耕耘にたへず。
仇敵境界を接するを亥と云ふ

孩の図



之れを八八と云ふ。
母胎に住み母血を吸ひ母乳を呑み、母を食料として生活せるもの即、孩なり。
而して母は之れを喜び、之れを愛撫し、之れを養育す。
これをマンコと云ふ。
七の妙用なり。

カミヨは七にして五にして八にして百にして千にして萬にして一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。
之れをチチハハと呼び、ミオヤとも、オヤとも称へまつりてアメツチノカミワなる資料なり財貨なり。
あちめあちめあちめあちめあちめ。
ああひがてんじんゆうあいこう。
ちちははみおやみおやみなともにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。
あすばかすやぞ。さからかすやぞ。
おおおおおおおおおおおお。
ああひがてんじんゆうあいこう。

零(一)に内在する原理として、一二三(ヒフミ)があるように、

空零(六)に内在する性質として六七八(ムナヤ)がある、と考えて良い。

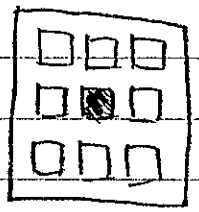
○ヒが二重相としては(◎)つであるが故に、

それは(◎)ミとなり、「零の自己組織化」が可能となる。

同様に、空零もまた状況次第では陰陽不測のメとなる。

母としてのメと子としてのメの離合集散によって、また

箇体が成立する。これが〰〰と描く「七の妙用」である。
(九)



(九→十)

九は中心(一)と外部(八)
これを一つにまとめて十とする。

チチハハ ミオヤミオヤナベテノ ミタマ
父母乃祖乃宗諸有身魂。
ミナトモニサトリサトル
發得菩提妙音吉祥。
サトリサトレバアマネクヒトツナリ
妙法蓮華經普門品。
ヒトノクルトキムコトアラニハダヒトスガニクウセイオンノ
衆生若有受諸苦惱一心稱名觀世音即
ミナラタヘマツレ、シカラバミナトモニソノミコエヲバテサトル
時觀其音聲即得解脫。ベキナリ

コレヲメウオントタヘクウセイオント
念彼觀音力妙音觀世音 梵音 海潮音
ベテノイサヲナリイサヲレヲナリ ノリナリサチナリ サチナリ
具一切功德慈眼視衆生 福聚海無量是故
クウセイオンナリ ブウナリ クウセイオンブウナリ
故觀世音佛。
チチハハミオヤミオヤベテノミタマニヲシマスナリ
父母乃祖乃宗諸有身魂坐
アラヒガテニウアイコウニヲシマスナリ

此ノ身此ノママノ佛ノ国ナル極樂世界。

此ノ身此ノママ佛ノ国ナル極樂世界ナリト解脫ル時ハ

此ノ身此ノママノ極樂淨土ナリ妙不可思議界ナリ一

切佛ナリ一切魔軍ナリ一切魔軍ナル一切佛ナリ。

人若シ苦惱ナリト思ハバ魔界ニシテ魔軍ナリ

サレド其ノママノ心事ニ念ニ佛名ヲ稱ヘマツレバ直ニ佛ノ

国ナリ極樂世界ナリ之レ解脫ナリ大死ナリ涅槃

ナリ一切有ナル一切無ナレバ極大ニシテ極小ナリ極無極ナリ。

稱名ハ直ニ佛體ナリ妙相ナリ妙用ナリ觀世音ト名ヅクルナリ。

一心專念ニ佛名ヲ念誦スレバ即時ニ妙音ナリ觀世音ナリ梵音ニシテ海潮音ナリ一切ノ功德ナリ一切ノ福壽ナリ一切ノ權威ナリ即菩提ナリ佛ナリ此

原稿用紙
10×20

ノ身此ノママノ観世音佛ナル極樂世界ナリ。

此身此ノママニ佛ナリ只此身此ノママニ佛ノ世界ト成リ名ナリ成ル名ナリ観世音佛名ル観世音菩薩ニテマシマスナリ。

以上

昭和十年弥三月三十日書寫

「稱名」とは、「佛体」であり、「妙相」であり、「妙用」であり、「観世音」という。

稱名を一心専念に稱れば、即時に「妙音」となり、「観世音」となり、この身この まま の「観世音佛」となる。「極楽世界」となる。

この身この まま 佛の国である 極楽世界であると さとる時は、この身この まま 極楽浄土である。

もし、人が苦脱あると思った時は、それは魔界にあるが、一心専念に「稱名」を稱れば 直ちに 佛の国である。極楽世界となり、これが「解脱」であり、「大死」であり、「涅槃」であり、「一切の有で一切の無」で「極大にして極小であり、極無極の人」ということになるのである。

「マ」の生滅起伏であるからには、その「カミ」の意志を無視して、人のみの意志の自由は成立しない。それ故此の問には、「マ」自体の意志で、それが則、「カミ」の意志で、〇の出没変転であると答へる。

第十五問、

先に箇体成立の活動状態を学んだのですが、崩壊滅尽の姿はいかがですか。

□答、

之レには、日本古典がそのまま良き答案である。先には、諸冊二神の「和合」に因って、天地万有一切合が成立した・生産された。ところが「火神」をお生みになったために・「火神」の出現に依って、大悲劇が演され、ヨモツヒラサカの一線を境として、天界と地底・顕界神域と幽界魔境・極楽と地獄・とが湧出した。古記・書紀・等のアノ記述はマコトに精密であり確実である。その記述をそのまま簡単な形で書くならば、先づ火が出現する。その神の姿は、私どもの見慣れたところで、〇と画く。それが、四象と呼ばれる箇体□を焚滅ぼす。その状態は千態万様だが、いづれにしても、下向転落する。下向転落すると雖も、直線的ではない。上進展するにも、右旋左旋・左旋右旋・変転しつつ、完成せんとしたる如く、此の□(箇体火)は〇上に在りて、ま、〇と化る。〇と化しつつも、水火交錯、幾変転、遂に「空なる〇」と成る。「成る」とは、「〇なる一」である。

此の「〇なる一」は、勿論、解体解脱の極で、「根之国・底之国之主」たる須佐之男大神である。

このスサノヲノオホカミに養ひ育てられて、大国主神は完成される。則、堅固大成の極で、「一なる〇」である。古典は之レを、イザナギノオホミカミなるミハシラノウヅノミコ(伊邪那岐大御神・三柱・子)だと伝へ、成り成りて、成り成りたる〇

註）　天津神と国津神との区別について

多田流では、

天津神とは、無宇宙の側に属する諸力・諸実体。

「○(こ)が○(と)のままに産霊(むすび)産魂(むすび)たる神(カミ)」のこと。

国津神とは、宇宙の側に属する諸力・諸実体。

もはや○(こ)ではない◎(ミ)を築いた神、のこと。

（言霊の幸、186-187頁ほかを参照）

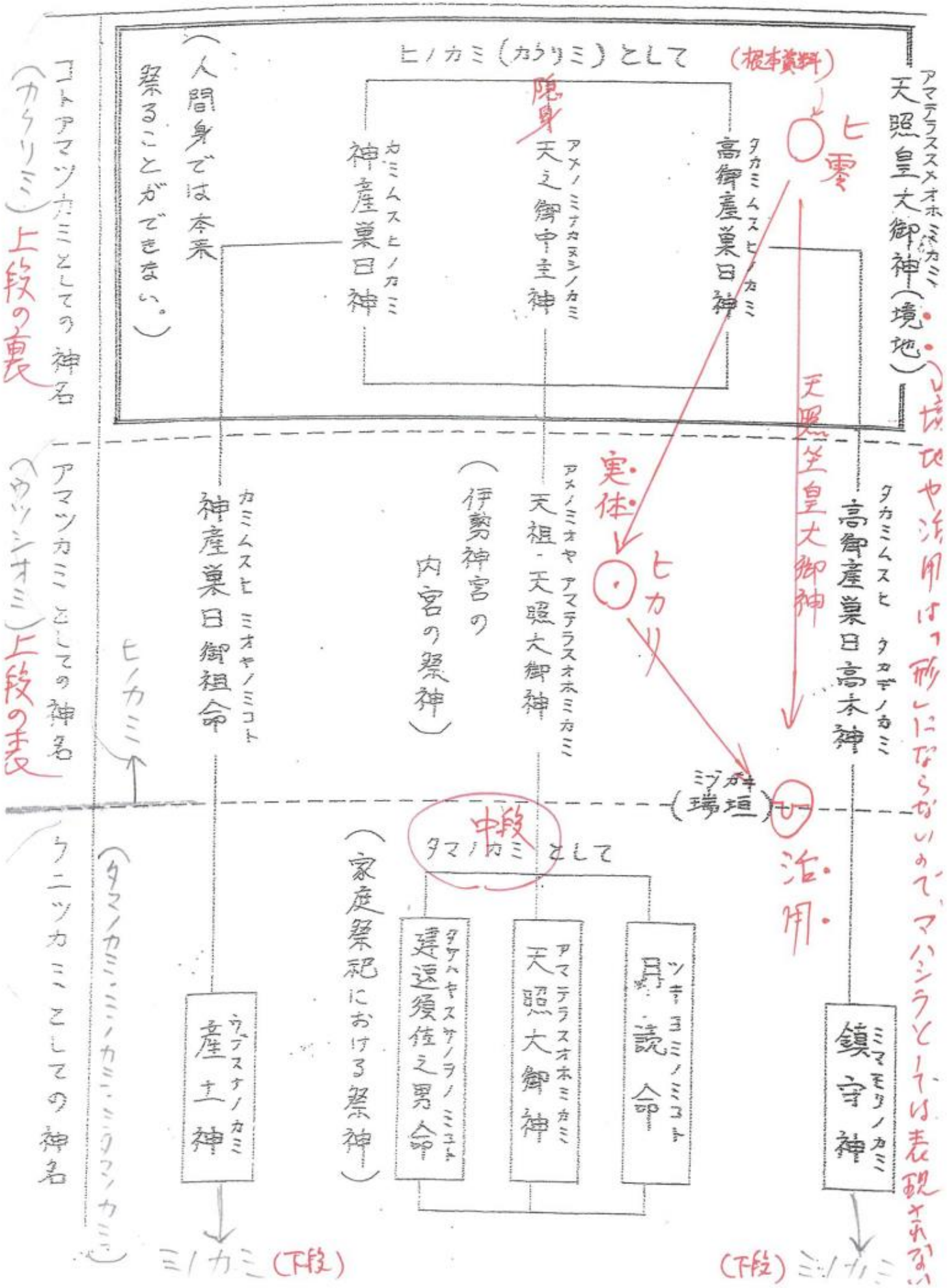
神話や祝詞では、

天津神とは、高天原(たかまのはら)（天上の神界）に坐す神々のこと。

国津神とは、出雲国(いづものくに)など、地上の神界に坐す神々のこと。

（古事記や延喜式祝詞を参照）

図表・くハンノにのりる工具子



目次へ：天之御柱国之御柱